中二な世界に跳ばされて

ガスキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
中二な世界に跳ばされて

【Ｎコード】
Ｎ５０５７ＢＡ

【作者名】
ガスキン

【あらすじ】
その世界はノスタルジアと呼ばれていた。かつて、『名を与えし者（リネーム・マスター）』と呼ばれた人物が邪神を封印し、ノスタルジアを救った。しかし、それから千年後、ノスタルジアに再び暗雲が立ち込めようとしていた。高校二年生の竜胆　清人は、『月満ちる夜、救世主は聖王山の池を通じ、新たなる世界へ旅立つ』という言い伝えを信じた中二病の友人に連れられ、聖王山の池に向かった。そこでちょっとした拍子に池に落下した清人は、気付くと見知らぬ場所で、見知らぬ女性の前に立っていた。言い伝えは本当だった。彼は救世主として

ノスタルジアへと跳ばされてしまったのだ。その世界で清人は、帰る方法を探しつつ、異世界ライフを送る事になった。果たして、彼は無事に元の世界に戻る事が出来るのだろうか。※一度削除し、新しく書き直しました。また読んで頂ければ幸いです。

プロローグ　待つ者と見る者（前書き）

再スタートです。今度こそ面白い物を書いてみせます。

プロローグ　待つ者と見る者

森の中を一人の女性が歩いていた。艶やかな紅い長髪を揺らし、同じく紅い目で、目的地の方角を一点に見つめている。その顔だちは、街中を歩けば男達の視線を集めるには充分過ぎるほどの美しさだった。

しかし、彼女の纏っている物を見れば、彼女がただの女性ではないのだとわかる。陽光を反射し、輝いているのは服ではなく鎧。持っているのは鞄ではなく、巨大な剣。女性は前方を塞ぐ枝や草を剣で薙ぎ払った後、剣を背負い、今作った道を進む。

やがて、女性は森を抜け、大きな広場に出た。この広場こそが、彼女の目的地だった。女性は広場の中心へと進み、そこへ座り込んだ。

「・・・・」

動かず、しゃべらず、女性はただひたすら座り続けた・・・。いや、待っていた。心地よい風が彼女の頬を撫いで行くが、女性は目を閉じひたすら待った。気付けば、高くあがっていた太陽が、沈もうとしていた。

「・・・・今日も現れなかったか」

溜息を吐き、女性は立ち上がり、森へと歩き出した。出来る事なら、まだこの場に残っていたかったが、夜は魔物の動きが活発化する。この周りの魔物程度なら彼女にとっては相手にもならないものばかりだったが、それでも、両親や妹達に余計な心配をかけたくなかった彼女は、後ろ髪をひかれる思いでその場を後にした。

「救世主よ・・・そなたはいつになれば我の前に現れてくれるのだ・・・・」

女性は空を見上げ、小さくそう呟いた・・・

少年は夢を見ていた。見た事も無い場所で、会った事の無い人物に囲まれていた。なのに、何故か少年は懐かしさを覚えていた。

「のう〇〇〇よ。お主、これからどうするつもりじゃ？」

古風な話し方で少年に声をかけたのは、背中から翼を生やした少女だった。その少女の問いに、少年の口は勝手に言葉を紡いだ。

「そうですね。世界は平和になりましたし、気ままに旅でもしましょうか」

「じゃあ、私もご一緒します！」

耳のとがった別の少女が手をあげてそう言った。さらに、その隣の女性も、さらにその隣の頭に角を生やした男性も同じ様に手をあげた。

「わたくしもご一緒しますわ」

「お前といると退屈しねえからな。嫌でもついて行くさ」

当然だとばかりな三人の態度に、少年は思わず声を出して笑ってし

まった。

「あはは、じゃあ、これからも一緒ですね。みなさん、これからもよろしくお願いします」

「「「（はい！）（ええ）（おう）」」」

「待てい！　妾を無視して勝手に話を進めるでない」

「ならお前はどうするんだよ」

「当然、妾もついて行くぞ。妻である妾が夫である〇〇〇から離れるわけにはいかんからの」

「聞き捨てなりませんわね。〇〇〇様の妻はわたくしですわよ」

「違います！　私です！」

言い争いを始める三人。男性がニヤニヤしながら少年に話しかける。

「さすが、『リネーム・マスター』様はおモテになりますな」

「か、からかわないでくださいよ」

「はは、スマンスマン。それで、旅をするって言うが、進路はもう決めてるのか？」

「ええ、まずは西へ行こうかと」

「了解。それじゃあ出発しますかな。おいそこの三人、置いてくぞ」

歩き出した少年と男性の後を、三人の少女が慌てて追いかける。彼らの新たな旅は、こうして幕を開けたのだった。

・・・・・・・

・・・・・・

・・・

ピピピピピピ！

「・・・・ん」

目覚まし時計の音が鳴り響き、夢を見ていた少年は右手を動かしてそれを止めた。

「なんか・・・不思議な夢だったな」

少しだけ見ていた夢について頭を巡らせた少年だったが、すぐに別の事へ切り替えた。

「っと、そんな事より弁当作らないと」

少年は自室を出て台所へと向かった。

何かを待ち続ける女性と、不思議な夢を見た少年。一見、何の繋がりも無いこの二人が出会う所から、この物語は幕を開ける・・・

第一話　いざ中二の世界へ

目の前で理解不能な事が起きれば、大抵の人間は固まってしまう。清人は今正にそんな状態だった。

清人は木に囲まれた広場にいた。そんな彼の前に立っているのは、紅蓮色の長髪に、真紅の瞳の女性だった。身長はおよそ１７０センチ後半だろうか。女性としては高めの身長だ。しかし、それより目を引くのは、彼女の全身を覆っている頑強な鎧だ。無駄な装飾を省き、機能だけを追求したその鎧は傷一つついていない。さらにその背には、彼女の身長と同じくらい長く、巨大な剣が背負われていた。

「☆□※@▽○∀！！」

女性は聞いた事のない言葉で清人に向かって話しかけている。その二人の周りを、豚の顔に、人間の体を持つ生物が数匹取り囲んでいた。手には棍棒を持っている。あれで自分達を殴り殺そうというのだろうか。

「な、何だよこの状況は・・・！」

恐怖と戸惑いに苛まれながら、清人は今日一日の事を思い出していた・・・

ここに一人の少年がいる。名前は竜胆（りんどう）　清人（きよと）。十七歳の高校二年生である。同学年の平均より少し高い身長を持つ事と、運動神経が少しいい所以外はこれといった特徴のない少年である。しかし、彼には他の生徒達とは決定的に違う所が一つあった。彼には家族がいな

かったのだ。

彼の両親がいなくなったのは、彼が四歳の時だった。何かの用事で三日間家を空ける事になった両親は、清人を母方の祖父母に預けた。

「いいか清人、お義父さんとお義母さんに迷惑をかけるんじゃないぞ」

「お土産買って来るからいい子で待っててね」

そう言って清人の頭を優しく撫でた二人は、そのまま帰って来なかった。一週間が過ぎ、一ヶ月が過ぎ、一年が過ぎても、両親は清人の元へ戻って来なかった。祖父母は警察に捜索願を出したが、やがてそれも打ち切られ、両親は鬼籍に入った。

「お父さんとお母さんはいつ帰って来るの？」

清人は何度も祖父母に問うた。その度に、祖父母は優しく清人を抱きしめた。いなくなった両親に代わり、祖父母はたくさんの愛情を注いで清人を育てた。おかげで、清人は道に外れる事も無く、真っ直ぐな少年に育った。両親の事も、中学に上がる頃には受け入れた。

しかし、その祖父母も、二年前と去年に亡くなってしまった。現在清人は、祖父母の残してくれた家で一人暮らしをしながら高校へ通っていた。

「おはよう同志！　いや、“ワンハンド・トール”よ！」

朝のホームルーム前の時間、席に着いていた清人の前に、眼鏡をかけた男子生徒が立った。名を近藤　総太。ゲームオタクでフィギュ

アオタク。さらに、中二病という厄介なものを抱えている。高校生にもなって中二病かよ・・・と突っ込みたくなるが、清人のクラスの約半分の男子が、未だ中二病から抜け出せないでいる。中には、高校生になって発症した猛者もいるらしい。

「おい総太。その呼び方止めろって言っただろうが」

“ワンハンド・トール”とは、総太がつけた清人のあだ名・・・ではなく、栄光ある二つ名・・・らしい。以前、二人がグラウンド前を移動中、総太に向かって飛んで来た野球のボールを、清人が片手でキャッチした事が切っ掛けでつけられたのだ。本人は感謝のつもりらしいが、つけられた本人にとっては恥ずかしさしか湧かないものだった。

「何を言う！　せっかく、この“ダークネス・ウィザード”の天才的な頭脳を守った功績を称え、俺自らが名付けてやったというのに！」

「恥ずかしいって言ってるんだよ。というか、自分で天才とか言うな」

「ふははは！　学年トップの俺が言うのは間違っているか？」

「それが納得いかないんだよ。何でお前がトップなんだ？　いつもアニメやゲームの話しかしてないのに」

「俺に不可能は無い！　決して、成績が下がったら母さんに色々没収されるから頑張ってるわけじゃないぞ！」

「・・・なるほど、納得した」

こいつらしいな、と清人は苦笑いを浮かべた。総太は眼鏡の位置を直しつつ、再び口を開いた。

「それより同志。今日は貴様にいい話を持って来たぞ！」

「お前がそう言って今までいい事があった事は一度もない。伝説のメイドがいるとか言って街に連れ出されれば、不良の溜まり場に辿り着くし。販売中止になったゲームが密かに出回ってるとか言うのでボロボロのゲームショップに向かえば、とんでもないクソゲーつかまされただけだし。ハッキリ言って、お前の言う事は百二十パーセント当てにならん」

「そんな事あったか？」

「殴るぞ」

「冗談だ。それに、今回の話は今までの下らないものよりずっといい話なんだぞ」

「今自分で下らないって言ったな」

「いちいち突っ込むな！　いいか？　『月満ちる夜、救世主は聖王山の池を通じ、新たなる世界へ旅立つ』・・・こんな言い伝えを知ってるか？」

「聖王山・・・ああ、あの中二山な」

聖王山とは、清人達の住む街のはずれにある小さな山の事である。一応、それなりに由緒ある山らしい。名前がそれっぽいという事で、

清人は中二山と呼んでいる。

「聖王山には確かに池が存在している。という事は・・・この言い伝えも真実だという事だ！」

「んなわけないだろうが。救世主だ何だって、それこそお前みたいな中二病のヤツが流したデマだろ」

「ならば！　今日の夜、俺と貴様で確かめに行こうではないか！幸い、今日は満月だ。『月満ちる夜』という条件を叶えている！」

「嫌に決まってるだろうが！　というか、俺を誘うより『中二部』の連中でも誘えよ」

「『中二部』ではない！『ラグナロク部』だ！」

『ラグナロク部』とは、総太が部長を務めている部活の名前である。そこでは、日々中二的な活動が行われているらしい。ちなみに、非公式である。

「駄目だ！　他の同志達は、今日の深夜に放送される『撲殺魔法少女キュルルン♪　メリーちゃん～聖天使光臨編～』をリアルタイム観賞する為に出て来られん！」

「撲殺する魔法少女なんて聞いた事ねえぞ・・・。それで、お前はいいのかよ？　そのアニメを見なくて」

「録画しているから無問題だ！」

「はあ・・・ったく、しょうがねえな」

そこまで聞かされると、清人としては断る事が出来なかった。“困っている人がいたら、迷わず助けてあげなさい”・・・祖父母のこの言葉を実践する事を誓った彼は、こういった下らない事でも自分に出来る事があるのなら手伝ってしまうのだ。それに、総太は清人の境遇を知っても同情しなかった数少ない人物の一人だった。

「貴様の家庭の事など俺は知らん。貴様は貴様だ」

本当にどうでもいいようにそう言った総太に、清人は好感を持った。下手な同情は迷惑なだけだ。それならいっそ、気にしないでいてくれた方がずっといいと清人は考えている。

「それでこそ同志だ！　では、今夜の十一時に、聖王山の入り口に集合だ！」

「わかった」

「いいか！　遅刻したら、我が最大魔法“ジェネシック・イグニション”をお見舞いしてやるからな！」

「なら、お前が遅れたら鼻エンピツな」

キーンコーンカーンコーン！

「席につけ、ホームルームを始めるぞ」

「では、詳しい話はまた後でな」

そう言って、総太は自分の席に戻って行った。担任の連絡事項を聞

き流しながら、清人はぼんやりと考えていた。

「（『月満ちる夜、救世主は聖王山の池を通じ、新たなる世界へ旅立つ』・・・か。どうせガセなんだろうけど、何故か胸騒ぎがするのは気のせいか？）」

「こら竜胆。ちゃんと聞いてるのか？」

「あ、す、すいません」

それから、あっという間に時間は過ぎ去り、今は午後十時五十分。清人は待ち合わせ場所である西王山の入口で、総太が来るのを待っていた。

「待たせたな同志！」

「おまっ・・・何だよその荷物」

パンパンに膨れたリュックを背負った総太に、清人は思わず目を見張った。

「旅だった世界がもし戦争中だったりした時の為に、武器を持って来た」

リュックを下ろし、中身を取り出す総太。刀や、槍、果てはマシンガンなど様々な武器が次から次へと飛び出す。

「へえ、レプリカにしては妙にリアル・・・痛っ！」

「あ、その刀本物だから」

「なっ！？　何で本物持ってんだよ！？」

「家の蔵から持ち出した。こっちの槍も本物だぞ。さすがに銃はエアガンだが、それでも、まともに当てれば骨が砕けるくらいの威力はあるぞ」

「お前・・・馬鹿だろ」

「失礼な！　用心に越した事は無いぞ！　そんな事言うんなら、お前には貸してやらないからな！」

「そんな物持ってたら銃刀法違反で捕まるわ！！」

「ふん、まあいい。それより、そろそろ出発するぞ」

武器を仕舞った総太が登山道を登り始める。その後を清人も登り始めるが。中腹までさしかかった所で、総太の歩く速度が目に見えて落ちて来た。

「ぜえ・・・ぜえ・・・ま、待ってくれ・・・・」

「バテるの早過ぎだろ。だから運動しろって前から言ってただろうが」

「う、うるさい。俺は、頭脳派なのだ」

「はあ・・・仕方ないな。そのリュック貸せよ」

代わりにリュックを背負う清人。対する総太は、息を吹き返したよ

うに登山道を走り出した。

「遅いぞ同志！　速く登って来い！」

「こ、この野郎・・・」

山頂までもう少しという所で、分かれ道があった。右は山頂へ、左は池へと通じているらしい。

「もうすぐだな」

「そういえば、池に行くのは初めてだな」

「俺もだ」

やがて、二人の前に大きな池が見えて来た。底が見えるほど透き通った水面に、大きく満月が映っている。

「・・・・すげえ」

あまりに美しい光景に、清人は目を奪われていた。

「さあ、いよいよ新たな世界に旅立つ時が来た！　さあ！　飛び込むのだ！」

「誰が？」

「もちろん、貴様だ同志」

「・・・・は？」

「さあ！　勇気を持って飛び込むのだ！」

「ちょ！　押すな・・・って、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

バシャアァァァァァァァァァァァァン！！

背後から突き飛ばされ、清人は勢いよく池に飛び込んだ。

「どうだ！？」

十秒・・・二十秒・・・三十秒・・・・いつまで経っても清人は上がって来なかった。

「こ、これは・・・まさか、本当に別の世界に行ってしまったのか！？」

震えだす総太。自分のしでかしてしまった事の大きさに気付いた・・・・わけではないようだった。

「素晴らしい！　これぞ、俺が求めていたものだ！　待ってろよ同志！　すぐに俺も行くからなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

バシャアァァァァァァァァァァァァン！！

意気揚々と飛び込む総太。だが、いつまで経っても彼が別世界に移動する事はなかった。

「何故だ！？　何故俺は行けないんだ！？　まさか、選ばれた者し

か行けないのか！？　同志！　同志ーーーーッ！！！」

雲一つない満月の空に、総太の声が響いた。

・・・・・・・

・・・・・・

・・・

「（そうだ。俺は、総太の馬鹿に突き飛ばされて、池に飛び込んだんだった。でも、周りには池なんて見当たらないし・・・まさか、本当に別の世界に飛んでしまったのか！？）」

「※@▽！」

女性が何かを叫ぶ。それと同時に、清人達を取り囲んでいた生物達が襲いかかって来た。

「プギャアァァァァァァァァァ！！」

「う、うわっ！？」

思わず頭を抱え、その場にうずくまる清人。だが、いつまで経っても痛みは襲って来なかった。恐る恐る顔を上げると、そこには大剣を持った女性と、地面に横たわる生物達の姿が見えた。女性の横薙ぎが生物達を吹き飛ばしたのだ。

「☆□▽∀・・・」

つまらなそうに剣を地面に突き刺す女性。この女性がいれば助かる・・・。清人は守ってもらうだけの自分に情けなさを感じつつ安堵した。

「プギャアァァァァァァァァァァァ！！」

吹き飛ばされて怒ったのか、生物達が再び棍棒を振り上げながら二人に向かって襲い掛かる

「□※○∀！！」

しかし、女性は落ち着いた様子で剣を振るう。その途端、刀身から激しい炎が噴き上がり、三匹のオークを一瞬で火達磨にした。

「ほ、炎！？」

清人の顔が驚愕に染まる。

「プギャアァァァァァァァァァァ！！」

女性を脅威と感じたのか、残りの生物達は清人を無視して彼女を取り囲んだ。女性は不敵な笑みを浮かべていたが、さすがに多勢に無勢ではないだろうか。

「□@・・・」

「プギャ！！」

剣を構えた彼女に向かって、一匹が大量の砂を投げつけた。目に砂が入り、女性の視界が潰れる。

「※〇∀！？」

目を擦りながら、それでも女性は片手で剣を持つ。砂を投げつけた一匹が彼女に飛びかかった。

「う、うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

気付けば、清人は走っていた。そして、その勢いのまま、女性に飛びかかった生物に向かって渾身の体当たりをかました。

「プギャ！？」

体当たりされた生物は大きく吹っ飛び、木にぶつかると、そのままズルズルと地面に落ちた。

「今だ！！」

「☆□※！！」

視界が戻った女性が残りの生物達を片付けるのにそんなに時間はかからなかった。

「お、終わった・・・のか？」

生物が全て息絶えたのを確認し、清人はその場にへたり込んだ。緊張と興奮と恐怖がごちゃ混ぜとなって清人の胸を埋め尽くす。

「※@▽」

そんな清人に、女性は微笑みながら手を差し出す。同じ様に手を差し出すと、女性は引っ張って清人を立たせてくれた。

「助けてくれてありがとうございます」

「※○？」

「ええっと・・・キャンユースピークイングリッシュ？」

「※▽○」

「駄目か・・・参ったな・・・・」

言葉が通じなければ、礼を言う事も質問も出来ない。どうしようか悩む清人。すると、女性が自分を、次に清人を、そして、最後に森の方へ指を向けた。

「一緒について来いって事か？」

「※@▽○」

指差した方向へ向け歩き出す女性。清人は少し迷ったが、ここにいてもしょうがないと思い、女性の後を歩き始めた。

「・・・・ん？」

清人の目に見覚えのある物が見えた。総太の代わりに背負っていたリュックだ。

「一応、持って行った方がいいか」

リュックを背負い、清人は再び女性の後を追いかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5057ba/

中二な世界に跳ばされて

2012年1月14日02時46分発行